

5つのエリアに35のサイト

- Area A 幌満峡エリア
- A1 Geological

第2発電所
- A2 Geological

旧オロビン採石場下の河原
- A3 Geological

ゴヨウマツ記念碑
- A4 Geological

不動の沢
- A5 Geological

第2発電所えん堤
- A6 Geological

幌満川稲荷神社
- A7 Geological

幌満ダム(第3発電所えん堤)

- Area C 様似海岸エリア
- C1 Geological

塩釜トンネルとローソク岩
- C2 Geological

親子岩とソビラ岩
- C3 Geological

エンルム岬
- C4 Geological

観音山
- C5 Historical

等澗院
- C6 Geological

平宇の屏風崖
- C7 Geological

様小裏の旧石切り場
- C8 Historical

岡田のチセ(アイヌ伝統家屋)

- Area B アポイ岳エリア
- B1 Ecological

第4休憩所
- B2 Ecological

高山植物再生実験地
- B3 Geological

5合目山小屋
- B4 Geological

6〜7合目
- B5 Geological

馬の背お花畑
- B6 Ecological

アポイ岳
- B7 Ecological

旧幌満お花畑
- B8 Geological

アポイ〜吉田間
- B9 Geological

吉田岳
- B10 Geological

ピンネシリ

サイトとは、ジオパークの「見どころ」となるスポットです。地形・地質(Geological Site)、生態系(Ecological Site)、文化・歴史(Historical Site)の3種類があります。

スマホ・タブレットからサイトを確認！「ぽけっとジオ」



「ぽけっとジオ」は、モバイル端末のGPS機能を利用してアポイ岳ジオパークのサイトや観光スポット、飲食店、宿泊施設などを紹介します。

ぽけっとジオ



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を使用した。(承認番号 平29情使、第419-GISMAP40298号)

多彩なかんらん岩がつくる峡谷 幌満峡エリア

Horomankyo Area



アポイ岳の東方に、約8kmにわたって続くかんらん岩の峡谷が幌満峡です。深谷の山腹には、原生的な針広混交林が広がり、なかでもキタゴヨウは、分布の北限であり山腹一帯に優占的に分布するという特異性もあって、1943(昭和18)年に国の天然記念物に指定されています。10月下旬の紅葉は知る人ぞ知る名所です。また、途中には、昭和初期に日高地方の電源開発の先駆けとなった水力発電所があり、産業遺産ともいえるたたずまいを見せています。林道の幅員は狭く未舗装ですが、要所に退避スペースが設けられており、乗用車で十分に通行できます。アポイ岳とともに、約10km四方の「幌満かんらん岩体」の中にある幌満峡は、地下深くのマンテルで起きたできごとを知ることのできる場所。このエリアにはさまざまなタイプのかんらん岩を観察する、研究者向けサイトが点在しています。



天然記念物のキタゴヨウと紅葉 人造湖の幌満湖 70年以上の歴史を持つ水力発電所

かんらん岩がつくる固有の高山植物 アポイ岳エリア

Mt. Apoi Area



アポイ岳は、軽装備で楽しめる比較的登りやすい山です。しかし、登山口は海岸線から1kmほど内陸の標高80mのところとあり、中こう配を700m以上登るため、それなりの体力が必要です。登山口からしばらくは針広混交林の中を登っていきませんが、この中でもさまざまな草本植物を楽しむことができます。5合目の山小屋付近から森林限界となり、ゴツゴツとしたかんらん岩の露地にハイマツ帯が広がり、色とりどりの高山植物もこの辺りから目立つようになります。天気が良ければ眼下に広がる太平洋のパノラマや、馬の背から望む日高山脈なども楽しめるでしょう。頂上までの道のりは、人によって2時間半〜3時間半、往復で4時間半〜6時間程度です。地下深くのマンテルからやってきたかんらん岩がつくる「花の山・アポイ岳」。その貴重な自然を求めて毎年多くの登山客がここを訪れています。



5合目までの針広混交林 尾根部は天然のロックガーデン かんらん岩がむき出しの稜線部

大地のストーリーと人々の歴史 様似海岸エリア

Samani Coast Area



切り立ったアポイ山塊の地形とは対照的に、その西方にはなだらかな丘陵地が広がり、海岸線沿いには様似の市街地が形成されています。海岸線には、大小いくつもの岩山が並び、アポイ山塊とともにこの地域の景観的特徴を表していますが、この独特の景観には、何百年も自然と共生してきたアイヌの人々の伝説が数多く残っています。その一つ、昔ヤシ(岩)があったとされる観音山は、様似漁港を見下ろす標高100mほどの小さな山。展望台からは海に浮かぶ岩山やアポイ岳などが一望できます。また、様似漁港の東岸になっているエンルム岬は、かつての島が砂州の発達で陸続きとなった陸繋島。この麓に1799年、江戸幕府がシャマニ会所を置いたことが様似の黎明となっています。この展望台は、アポイ岳ジオパークを一望できるヒュースポットです。



アイヌの悲話を伝える親子岩 創業地開拓の歴史を伝える創業三官寺・等澗院 陸繋島のエンルム岬の板状節理

プレートの衝突現場といにしえの道 日高耶馬溪エリア

Hidaka Yabakei Area



アポイ岳の山裾が太平洋に落ち込み、約7kmの断崖絶壁をつくっているのが、日高耶馬溪と呼ばれる海食崖です。この場所は、かつてのユーラシアプレートと北米プレートがぶつかった場所といわれており、エリア内には一部ながらその境界部(日高主衝上断層)も残されています。えりも町の黄金道路と同様に日高山脈の南端にあたり、古くは交通の難所でもありました。断崖上には、約200年前に開削された「様似(シャマニ)山道」があり、現在はフットバスコースとして親しまれています。また、断崖下はかんらん岩の恵みを受けた良質の日高昆布(ミツイシコンブ)が生育しており、磯船での昆布採りや昆布の天日干し作業は、この辺りの夏の風物詩です。



海食洞の「冬島の穴岩」 冬には完全結氷する「オホナイの滝」 様似山道東口の和助地蔵尊

はるか南の海からやってきた岩石 新富エリア

Shintomi Area



日本列島の土台は、「付加体」でできています。付加体とは、海洋プレートが大陸プレートと衝突し、海底の深い谷(海溝)をつくって大陸プレートの下にもぐり込むとき、その表面が大陸プレート側に付け加わったもので、陸から流れ落ちてきた砂岩や泥岩と、何kmもはるか南方の海からやって来た石灰岩・チャート・玄武岩が混じり合い強く変形を受けて、「メランジュ」と呼ばれる異なる岩石の乱雑な集合体をつくっているのです。新富エリア周辺には、石灰岩がたくさん分布しており、古くから採掘されてきました。これらも付加体由来のもので、その証拠にこの露頭で見られる産状は、地層として連続しない典型的なメランジュ構造となっています。

